

十字路で立ち話抄二〇十一年一月～二〇十二年九月

猫と老人

吉田惠吉

目次

手狭な響き	1
わからないとわかる	3
雪道	5
降ったり止んだり	7
特效薬	9
老齡と老化	11
うすぼんやり	13
手ぶれ	15
学びの風	17
特等席	19
後はその場で	21

黙禱	23
寛容	25
とりあえず	27
とどける花に	29
薪割り	31
それとなく	33
常も乱れ	35
花の風向き	37
隣りあわせ	39
解き結ぶ	41
乗り合わせ	43
連休飛翔	45
場外パス	47

構え	49
汲み忘れ	51
手のうち	53
塗り分け	55
適材適所	57
谷渡り	59
シャッター音	61
遠い田祭り	63
Phoebe Snow	65
玄関灯	67
好敵手	69
下駄の音	71

六月の走馬灯	73
迂回路	75
夏の空耳	77
あの夏あの頃	79
耳直し	81
夏の対話	83
思出消夏	85
入道雲	87
夏の贈物	89
稜線歩き	91
山びこ花火	93
業と技	95
声と身振り	97

海よ空よ	99
気持ちも身体も	101
あるかなしか	103
ゾンビ前線	105
遭遇接近	107
墜ちた林檎	109
教室の秋	111
脱力散歩	113
日溜まり公園	115
身近な愉しみ	117
日々踏む不安	119
猫と老人	121

近道……………123

立冬……………125

六十の手習い……………127

山の端……………129

縁側からみち山まで……………131

吊り天空……………133

紅葉忘れ……………135

落ち葉の裏書き……………137

回文番組……………139

柔らかか背筋……………141

足指散策……………143

ハコの出入り……………145

煤払い……………147

顔なし……………149

橋と冬鳥……………151

時を着込む……………153

骨休め……………155

暗箱……………157

気まぐれ雪……………159

雪かき……………161

帽子に杖……………163

噛み合わせ……………165

配架作業……………167

ほどほどに……………169

読み人いずこ……………171

冬場を愉しむ	173
何食べたい	175
店じまい	177
ちぐはぐ	179
雪衣	181
お疲れさま	183
越せなかった冬	185
試し乗り	187
冬の出口	189
空き地めぐり	191
春嵐	193
接続不良	195
追悼	197

三回忌	199
架け替え	201
花見鳥	203
復興前線	205
食いしん坊	207
埋め合わせ	209
落ちこぼれ	211
乗り継ぎ	213
渦つなぎ	215
滞留前線	217
夏への補助線	219
梅雨花散策	221

素足往来……223

梅雨に唄えば……225

炎天望遠……227

夏の書誌……229

庭の間尺……231

苔の閱歴……233

手狭な響き

例年の「暖冬予報」が途絶えたみたい
今のところ積雪は大したことないけど
半端じゃない寒さに多重暖房をやったり。

さまざま暖房器具を使い捨ててきたが
祖父さん手作りの火鉢などもゴミに出し
麻雀台に使ったりした火燧はまだ使える。

団地の一軒家で新婚の借家住まいを始め
ほどなく郊外に新築して呼び寄せ家族に
合わせた間取りも二人の沈黙の空き部屋。

テレビのお正月番組を見なかった分だけ
積ん読の山が崩されたということもなく
火燧で日頃読んでる著者のネット音源など。

なじんだ家族や親戚の声が遠くなったり
いつの間にやら途絶えてしまった知人の
忘れてしまった声が歳月の消印を響かせ。

家事も覚束なくなった頃の母の詩吟など
身近で聞こえなかったようなことなども
遠ざかった後になってようやく届いたり。
(11.01.11)

わからないとわかる

教室での質問に応じて帰る廊下で
背後から「センセイ」と何度も呼ばれ
ようやく自分のことかと振り返れば。

繰り返し更新させられてきた時間講師が
いまだに身につかないようにわかるとか
わからないということがはつきりしない。

やってきたこと以上にわかっていたり
最後になってちつともわからないのも
いずれの学生もわかりかたのちがいだ。

はじめりは同じように見えていても
いつの間にか座り続けた椅子の数ほど
わかりかたの色合いに染めあげられ。

何がわからないかということだけが
わかっただけでもよしとすればいいし
わかるほどにわからないことの深みが。

答えようのない問いは出せないから
わかってもらわからなくても横っ飛び
ぶつかったら上でも下でも逃げ道を。
(11.01.14)

雪道

今季二度目の寒波で歩道も埋まりしかたなく圧雪状態の車道を歩き子どもらのバド練習に付き合った。

つるつるに凍った道を藁靴で滑り田畑を真っ白に硬く覆いつくした雪原の道なき道を辿ったことなど。

三八や五六豪雪で汽車やバスが途絶え通勤途上から歩いて職場に向つたり家に帰り着いた歩きから随分遠くへ。

車道の夜間除雪作業や通学や買物に不十分な除雪体制を整えて欲しいがどんな道でもしっかり歩ける整体を。

はっはっとした息継ぎで喘いでいたお袋は浅い呼吸で思うように歩けず転げ落ちるように車椅子の人で果て。

久しぶりに雪道を歩いて温もったが
歩き方だけじゃなくスキーもバドも
足腰の扱いや動きをどう維持するか。
(11.10.18)

降ったり止んだり

お正月から雪が降り止まない地域は
さぞ大変だろうが県内各地の積雪でも
山沿いと東西の違いがはつきり色分け。

なんだか冷蔵庫のなかで暮らすみたい
世相の景色を拭き払ったみたいなのが
アジア杯サッカー日本代表の戦いぶり。

カタール戦の後半で退場者を出したが
何度も見慣れたこれまでのもう駄目を
ひっくり返した長谷部の中央突破パス。

サイド攻撃一本やりで崩し損ねるうち
試合が終わってしまうみたいな壁から
抜け出せないスポ少バドの子どもらが。

六年生最後の大会で競うべき相手に
これまでとは違う気合いの入れ方で
結果を気にせずゲームを楽しめたら。

練習で着膨れしてしまうこともなく
状況に応じて生きのびられるような
技のポケットをどうやって育てるか。
(11.01.25)

特効薬

先月末からの大雪が峠を越したが除雪作業の汗がきつかけみたいにひいた風邪もくぐり抜けたようだ。

寝込むほどではないが外出予定はすべてキャンセルした三泊四日でテニスやサッカーをわが家のTVで。

アジア杯を勝ち取った日本代表の攻守自在な闘いぶりには風邪など気にならなくなってしまうていた。

Jリーグを二か月ばかり視察して短期間で見事なチームを仕上げたザツケローニ監督の手腕やいかに。

くわえて彼をイタリアから呼んだサッカー協会原博実技術委員長の組織的なしっかりした仕事ぶりが。

どんな風邪の時も薬だけじゃなく
医者にかかったこともないのだが
野口晴哉『風邪の効用』が手元に
(11.02.01)

老齡と老化

凍りついた庭木の雪玉も溶け落ちて二十日ぶりに晴れ上がった界限では久しぶりに雀が群れをなして電線に。

スキー板のワックスがけなど準備を見届けたヨメが手配したタクシーの運転手が運賃を値引きしてくれたり。

カービングスキーに乗り換えてから十シーズンあまりは家庭内の事情で年間滑走が途切れてしまったことも。

なんとか滑りこなしているヨメだがストレートの板で滑っていたころの滑り方に戻ったみたいで動画で確認。

新しい技が不十分で身についおらず持続が途切れそうになったりすると古い技を持ち出して間に合わせたり。

お互い歳を取ったようでやっている
意図と結果がちぐはぐにかけ離れた
形に収まりそうになってしまいがち。
(11.02.04)

うすぼんやり

床の間の掃除がてら一階と二階の高岡銅器をなんとなく置き換えてその重い冷たさに手指がびっくり。

組み立て式の夫婦鷹は叔父さんの新築祝いだつたが兜の置物がなぜわが家にあるのかが定かじゃない。

三反百姓の小倅が二十代の終わりオイルショックに揺れた前年だが田畑や屋敷を売り払って街場へと。

結婚した勢いだけで土地を買って加速したみたいに家族が住む家の推敲を重ねた図面を棟梁に見せた。

やや見通せそうに感じた世の中が所帯を持った頃から掴みどころを見失ったみたいで分らないままに。

新築なった茶の間で七十歳以上の
老人医療の無料化に縁がなかった
祖父は大相撲中継に身を乗り出し。
(11.02.08)

手ぶれ

心あるかぎり逃れられそうにない
生まれながらの不安というものは
へその緒を断ち切られたことから。

不安定をひっくり返してみたみに
回転が遅くなって横になった軸を
逆さに立て直して廻り続ける独楽。

かつて大相撲や紅白に見入ったが
今じゃスーパーボウルだけじゃなく
グラミー授賞式などが二月の定番に。

九〇年前後のソ連・東欧情勢を新聞で
追っかけたみたいに北アフリカほか
中東情勢などをネットで読むこの頃。

ホールドが安定するよう両手で支え
遠くを写せる交換レンズで動画など
撮ったらブレが多く見るに耐えない。

スキーのストックで支えてもいいが
首紐で吊るすようにしてへその前で
身体を三脚のように構えて撮ったら。
(11.02.15)

学びの風

新年度授業の準備に取りかかる矢先に梅の花便りならぬ「カリキュラム」の提出依頼を受け取りなんだかうんざり。

すべからく文科省のお達しへの対処も換骨奪胎を旨とすべしなんて言い草も自己点検評価業務の山に押しつぶされ。

短期的効率や業績評価からほど遠くて行政が踏み込めそうにないのが教育や研究だけじゃなく医療や介護の現場も。

入試問題のQ&Aサイトへの投稿など朝飯前みたいなご時世から取残され「想定外」に隔離されているのは誰。

学年歴のベルトコンベアに乗っかり授業評価アンケートなどをやらされ就活で疲れた教室で起きていられるか。

せめてぐっすり寝かせるべきなのか
ちよつとでも覚醒の夢が見られたら
これまでとこれからが違ったものに。
(11.03.01)

特等席

しぶといカダファイ大佐ならぬ冬將軍が最後のあがきみたいに雪を降らせたりして灯油タンクの底から眺める石油産出国情勢。

第1次オイルショックの頃に建てた屋内のガス配管のコック部分が現行基準に合わず取替え作業ついでに家具配置の見直しなど。

50インチに満たないテレビ画面が大きくなつたみたい映像が見えるようになるソファの置き場所が狭い洋間のどこかに。

さてテレビ画面の対角線の長さを2倍したあたりに腰掛けブルーレイHDに録画した「ミレニアム」を映して観れば試写会気分。

視野角にピッタリはまった1部の展開に並んで観ていたヨメのリクエストもあり夕飯を休憩にして2部に続いて3部まで。

照明をLEDに替えたり目にきついような
高画質はシアターモード設定で眺めたり
どうやら映画館から二人の足も遠のいて。
(11.03.08)

後はその場で

トイレを使って流し忘れたり飲んだ
ワインボトルを片づけようとしたら
半分ほど残っていて床にこぼしたり。

PCで書きためたバド関連ファイルが
壊れたのに気づかなかつたりしていて
バックアップごと駄目にしてしまった。

体育館に集まる小中学生や教室に
やってくる学生に相對する時など
準備したメモや資料などは白紙に。

春めいてもいないのにボケられるか
去年の花見ごろに介護の手を離れて
逝ってしまったお袋に笑われそうだ。

親と子による老々介護がきつくなる
日々の流れでヨメともど看取るうち
どこまで故人の意を汲みつくせたか。

あんなら二人だけの家族葬にして、
それに続く法事などは言い及ばず
あちらとこちらを行き交うばかり。
(11.03.11)

黙祷

ヨメと無病息災な冬越しの一コマ
背戸の雪囲い取り外し作業日和に
未曾有の大震災の渦中にある人々。

三月十一日の午後はB・メルダウの
素晴らしいライブDVDの終盤で
「揺れ」を感じ画面をTVに切換え。

ただならぬ地震と津波速報画面に
身体を引き止められそうになった
家を後に二人して夕暮れの街中へ。

前売りを用意した志の輔落語会の
幕が予定どおり上がった古会場は
満員の盛況だったが座席が窮屈で。

休憩の間も携帯したTV画面に映る
きれぎれな被災画面をどのよう
受けとればいいのか身体が戸惑う。

東日本を襲ったとてつもない壊滅の
厳しさが明らかになればなるほどに
追い討ちをかける原発の2次災害が。
(11.03.15)

寛容

シーズンを締めくくるのに絶好のスキー日和なのにその気になれず一昨日は部活への顔出しが億劫で。

朝方の胸痛で目が覚めたり日中に身体がおかしな具合になりそうので掃除や片付けごとで息遣いを保つ。

震災報道のテレビから抜けようと録り置き映画やダウンロードした音楽などともすれ違う日々の流れ。

いい歳をして何ともヤワなようでその場のフツーを探して目立たず臆せずいま・ここを呼吸するだけ。

都会の計画停電の闇から退去する外国人のように被災地の真つ暗闇を避難して県内への移住も始まって。

陸・海・空から始まった支援だが
福島第一原発めがけ人工の豪雨を
降らせて冷却する妄想に捉えられ。
(11.03.18)

とりあえず

どんより曇った朝空の隙間から陽射しが伸び雨上がりの屋根に偏西風が運んできた黄砂が残る。

ファインダー越しに鶯が鳴いた梅の木あたりをのぞいていたら電話が鳴って顧問の部活連絡が。

目立たない三文判を押しするような日常の隙間で原発事故について語るツイッターを調べてみたり。

当初発表された避難区域などで外国人と日本人と距離の違いがテレビ報道だけじゃおさまらず。

壊滅的な地震と津波の自然災害に被さってきた人工の自然災害とで振り回されそうになる身体の記憶。

ふと義援金アプリに手を出した
などとヨメに喋ったりしていて
お袋の一周忌の費用も義援金に。
(11.03.22)

とどける花に

中学校の体育館に近いといつても
気づいた時はもう春休みバド部活の
それも初日が終わってしまう時刻に。

教職を十年続けながら第一志望の
就活を成就させた若い顧問先生を
あてにしてサボったのでもないが。

被災地域で卒業式に臨む子どもらを
テレビ報道で見かけたりして表情や
仕種からつい溢れそうになるこの頃。

想えば阪神大震災の後で中越地震や
能登半島沖地震の揺れからも遠くて
2週間前の揺れも立山連峰が遮って。

精神科医が被災直後に書いた文体や
ほぼ一年後に被災地を訪れた詩人の
話し言葉などが繰り返し返す日々の葉に。

自然に向かう不信を飲み込むように
芽生える信がやがて倫理を象るうち
善悪を隔てる地形にばらまかれるか。
(11.03.25)

薪割り

庭の淡雪の跡にうつすらと草が生え
朝方はメッシュの帽子がなんとなく
寒かったのに昼には心地よい風通し。

響きに身体が細かく割れゆくから
寝起きの凝りをほぐすかのように
朝飯前に御鈴を鳴らし手を合わせ。

ライフラインが消えた被災地に
救援隊の手が届き運転手が車を
動かし郵便配達を足運ぶ光景。

きつく握りしめながらラケットを
腕に接ぎ木したみたに振っていた
新入生がいつの間にか身体を割る。

開いた体幹に弛んだ肩の先の肘を
追い越した手首を追い越していく
ラケットヘッドが空を割くように。

演奏の技術も細かく割れていければ
いるほど聴き慣れるほどに新しく
へたった再生装置も見事に鳴らす。
(11.03.29)

それとなく

きのうあたりから暖房要らずの陽気にテレビは節電や省エネを勧めているが義援金は一回だけで済ませられようか。

打ち続く余震みたいに更新され続ける原発事故のニュースには摩訶不思議な言葉だらけでわからないことが増えて。

シナリオをどこの誰が書きなぐるか
ぼんくら頭に「パンドラの箱」やら
「プロメテウスの火」が「復興」し。

巷の「風評」の渦の枠外から専門家が放射能汚染圏外に流れ出た「恐怖」を「無知」に置き換えたようにあざ笑う。

地元の「桜まつり」を囃したててきた

「全日本チンドンコンクール」の第五十七回が
3・11に急かされたように「開催中止」。

出場者数は戦後経済成長の坂を下り
狭い部屋では木刀や模擬剣代わりに
ラケットを振って身体をほぐそうか。
(11.04.08)

常も乱れ

ここ数日以来も大きな揺れを挟み群発している
余震を告げるテレビやラジオ報道を聞きながら
一周忌を待ったみたいに手を合わせる仏間の朝。

いつものように時間をかけて介護ベッドから
起きて車椅子に乗り移ってその日を過ごした
お袋がその日の夕方に急逝してしまうなんて。

同じ部屋で迎えた祖父の死が引越し間もない
三年目だったのに狭いわが家から溢れそうな
町内葬で見送れたのは昭和五十年の夏のさなか。

仏になったお袋の月命日のお参りはどうも
家族葬の場で年老いた檀家の二代目住職に
それとなく遠ざけられた隙間に読経を響かせ。

もののあわれから遠ざかるその日暮らしの
しがらみに絡めとられ固まった身体だから
凝りをほぐすように力を分散させて動けば。

例年のごとくの花便りを待つて二人で眺め
一度も母と車椅子の花見をしなかった日々
その日のことは暮れてみないとわからない。
(11.04.12)

花の風向き

乗り合わせる中高年女性が出控えたみたい
に Economyca (えこまいか) 仕様で使い始める
おでかけ定期で乗った路線バスの身軽な走り。

授業開始を遅らせることなく始まる乗り心地で
走り抜けた桜名所や丘陵地に乱れ咲く花模様
に着いた先の教室で履修生みんなの顔が揃わない。

宴会費用を義援金に当てたのを言い訳にした
直前の予約キャンセル話を酒の肴にヨメと二人
客足が遠のいている馴染み店で旬の味を満喫。

聞けば大震災の直前あたりからいつもは獲れる
春の魚が不漁だったりホタルイカなどで満杯に
なってるはずの腹に餌のかけらも見当たらず。

管理区域の農作物や汚染水など隔離できない
手抜きの手付けみために県内輸出商品の放射能
汚染表示が求められはじめた海外からの風当り。

命からがら着の身着のまま引き揚げてきた
母子家庭に吹き過ぎた風の冷たさあたたかさ
被害者に吹く世間の風も十人十色を聞き分け。
(11.04.15)

隣りあわせ

朝の予報どおりやってきた激しい雷雨にこびりついた屋根の黄砂が洗い流されず乾きあがるれば茶色い縞模様が浮かんで。

東西両隣の原発保有県に挟まれて暮らす有事の際の風向きは事故現場への距離で測ることのできない被曝要因になりそう。

放射線はともかく放射能物質の飛散など花粉予報のように毎日流せば変な怯えや要らぬお節介に振り回されることもなく。

今年の花見のひと時の賑わいを通り過ぎ人ごみに出かけ群衆に紛れ込む居心地も独身から所帯持ちへと違った模様を描く。

たくあん蒲鉾やお茶けを持ち寄ったのがコンビニ弁当とペットボトルに変わって知らぬどうしが行き交う土手に凧が舞い。

離れていても互いに呼応している道筋で
自分には見えない背中に背負わされてる
デイバッグの日替わり中味は相方に響き。
(11.04.19)

解き結ぶ

移り変わる季節をコンデジからデジイチ
そして動画カメラと撮り損なってるうち
帯に短し褌に長しのカメラバッグが増え。

イン&アウトを見てスコアの記入など
遠近両用だけではおさまらないように
遠目や手元や室内用そのほか眼鏡持ち。

五人家族の頃は何かと手狭みたいで
建て増しに手直しと持ちこたえてきて
お袋がいなくなつて二人きりの広さに。

肌寒い昼にこれ着てみたらとヨメに
羽織らされたロウサイズのブルゾンの
着心地の良さがお袋の形見だなんて。

振り上げた薪を打ち下ろさせまいと
背中から必死に羽交い締めにされた
落とし所が判らぬままに今日ここへ。

人一倍小さかった中学生が剣道部で
両手を離した握りを持って余したのに
両手をひとつに竹刀を振る北斎漫画。
(11.04.26)

乗り合わせ

前日の夏日が嘘のような市内を
吹き抜ける風に堀端の緑が波打ち
街路樹のハナミズキも千切れそう。

雨降るバス停から聴きはじめた
R・クレイ・バンドのライブ新譜が
終わりにさしかかるまでの道行き。

しばらく続いた不調を通り抜けた
みたいに丘陵を越えたあたりでは
今年も梨花の絨毯が煙ったように。

何の変哲も無い見慣れた眺めでも
3・11のあとでは身体の好不調に
かわわらず違ったように見えたり。

いまここの呼吸をつなぐ身体から
遠く銀河のあたりまで連れだして
くれそうな詩を読んだりしたいが。

帰りがけに覗いた本屋に無くとも
隣のケーキ屋で売れ残っていた
アップルパイの二人に手頃な大きさ。
(11.04.29)

連休飛翔

無愛想な隣人みたいなわが庭なのに
これまでとは違った盛んな花つきも
五月連休の花瓶の底に埋もれたまま。

どう人間の自由と幸福を呼吸する
四足歩行から立ち上がった詩人が
やがて元の歩みに戻ったりしたら。

手に握った道具を使いこなせない
不自由を肘や肩や股関節の感覚に
解消しながら意識を力にできるか。

残雪の立山連峰を覆い隠すような
薄曇り空の彼方から送り届けられ
“nishiyan”の言葉で遙かな高みへ。

地べたでは9・11の首謀者らしき
男の殺害の旗が水に突き立てられ
窒息しそうにもがく航跡の泡立ち。

休み中に部活はあるんでしょうか
男子新入部員らの問いかけ言葉に
応えられない先輩部活動のレベル。
(11.05.03)

場外パス

萌える緑を持って余し気味な五月連休
花が終わったあとの深呼吸みたい
在宅介護の日々の名残の影が揺れて。

デイサービスが利用できない連休や
年末年始の過ごし方も身につかず
老後の生きざまを学び忘れてしまい。

乳幼児期に世話をしてもらったお返し
などと言いつけたりした気休めにも
数時間毎に中断された生活時間の紙魚。

無理矢理でも身体を動かす続けようと
三日に一度は寝込んだり祖父はお袋の
介護の手間もほどほどに自然死に向い。

満期だろうが前倒しだろうが仕事から
解放された放課後の解放感を生きる
なんて事のなかった同僚や知人の後姿。

暮らし向きの様々な位置づけに抗って
どのようなパスの受け渡しができるか
人それぞれの老いの自然に流されがち。
(11.05.06)

構え

ちよつとした庭の草むしり以外はまるで
屋内退避したみたいに読み聴きしていた
大型連休の締めはスポ少のバド試合付添い。

練習量が足りなくほとんど勝ち目がない
コート内でシャトルに向つていく動きを
最後まで崩さないひたむきな初心者ペア。

昨日できなかったことが今日できるよう
練習を重ね明日のゲームに臨めるような
技の習得が途切れないよう持続できれば。

そのような場自体が途絶えているような
被災地の子どもらの現実を忘れないよう
大会に臨めと開会の挨拶で言われたつて。

瓦礫の眺めをバスツアーでなんてことが
やりきれないほど切羽詰まってしまった
あちこちで被災者であることの難しさが。

渡る橋も出発する駅も壊滅しているのに
子どもらはどうやって初めてラケットを
握ったりカメラで写す嬉しさを運べるか。
(11.05.10)

汲み忘れ

五月晴れにはほど遠い雨上がりに強風が取り壊されたばかりの住居跡を吹き抜け千切れんばかりに庭木の新緑を揺らして。

何をどう点検すればいいか分らないまままわり続けて止まらない井戸のポンプの夜も昼もないモーター音に急ぎ立てられ。

修学旅行を前に先輩部員が後輩を並ばせ日頃の挨拶ができていないように掛声も無く部活動を妨げる行為に退部届けを勧める。

やりたいと決めた練習方法もその場限り自分は何を知らないか／何ができないか自問自答する学びの姿勢を何処かに忘れ。

「調べ学習」だなんて言われなくたって調べるためにはまず調べるためのコトバそのものを知る必要があるという気付き。

自分の知識についての知識を持たないと
知識に梯子をかけて知識の縄梯子を上へ
下へと昇り降りする自在な知恵の仕組み。
(11.05.13)

手のうち

雨上がりの庭で新緑が伸びるように揺れ産道を抜け出たばかりの赤子の手が震え立ち上がった足の怯えで筋力の彼方まで。

歩行も覚束ない栄養失調の虚弱児童もわが家にあつた『宮沢賢治名作選』を手にめくってみる握力に恵まれて育ち。

夏の林間学校の参加も見学しただけで中学の部活も竹刀の握り方や振り方もカナヅチのままいつこうに体得できず。

喜寿そこそこで貧乏人の解放を目論む社会システムが崩壊してしまつたあと衰えゆく体力を補う身体使いに気づく。

被爆国としての筋力不足を補いながら道具を使いこなすトレーニング不足も露な最新エネルギー革命の七段目辺り。

「新緑の毒素」の階段で息を切らし
東北の「モーリオ市」あたりで降り
「イーハトーヴォ」を呼吸するまで。
(11.05.17)

塗り分け

真夏日になったり梅雨を前倒したような雨降りになったりめまぐるしい変わり目で傷んだモルタルや屋根の塗り直しの見積り。

家の建替えやリブートなんて考えられない五月の眩しい陽射しのような業者の説明と見積り金額にくらくらしそうな年金暮らし。

寒冷地や温暖地で塗り分けなきゃならず層に塗り分ける外壁塗装材料もさまざま放射能降雨地仕様塗装なんて知らないが。

かつて発売中止になったRCサクセションの反原発ソングなど聴き返したくもないけど『試行』68号の「原発問題の層」発言を見直す。

聴くのも疲れてきた福島第一原発報道に吉本さんが二十二年前に「原発」を五重丸の層で塗り分けた図が鎮魂歌のように響き。

安全性／地域・経済利害／科学技術的／
文明的な層を設定して整理してみせた
発言の続きが読みたくなってくる梅雨前。
(11.05.24)

適材適所

路線バスなんかだと真つ先に前か後の空いた席の顔ぶれはいつも同じようでも中間座席は何となく適当に埋ってゆく。

6回目の授業でコンピュータ室の机の並びが教卓対面から学生差向い配置に変わっても学生が居並ぶ席はほぼ同様。

今頃になって原発事故がメルトダウンだったなんて誰も驚いていないようでも今更だからこそ不信感は深まってゆく。

毎回就活欠席を数えない日はないのに学習するのに一生懸命で先のことなどいっこうに休まない学生はどうなのか。

社会に出てゆくまえにできることなら好きなことを好きなように好きなだけ二年間でもやれたらということないかな。

自分が何に向いているかだなんて何の
青虫なのかどのような葉っぱを好んで
食べているかで蝶の姿が決まってくる。
(11.05.27)

谷渡り

鶯を追い払うように郭公が鳴き始め
家の塗装修繕作業を中断させたまま
愚図つく空模様飛び交う野鳥の影。

築四十年近い老朽と補修のせめぎあい
足場に絡むように養生シートが煽られ
雨風で剥がれ落ちた下塗りの破片など。

なんだか廃屋の玄関の出入りみたいで
雨露をしのいできた住人の身体の方も
草臥れてきているに違いないようだが。

晴れ間に思い立ってちよつと遠出の
自転車ナビをセットしようとしたら
バッテリー切れでがっくりしそうに。

手足をいとにかく試み続けないと
どこがどんなふうにおかしくなったり
ダメになりつつあることに気付けない。

無線マウスの電池忘れを失念したり
壊れそうなイヤフォンを取り替えて
機器の性能よりも聴覚の衰えを疑い。
(11.05.31)

シャッター音

見かける野鳥の姿も冬鳥から夏鳥になり
ホトトギスの鳴き声などを聞き分ける
身体モードも寒冷から温暖に切り替わる。

体調が急にどん底みたいになって退職し
なんとか持ち直すような日々の暮らして
覚えたデジカメで撮ったのが花や鳥など。

出不精の無為のかけらみたいに溜まった
画像ファイルからプリントなどしないが
スクリーンセイバーにして眺めたりして。

何の変哲もなく見栄えのしない一枚でも
それぞれに撮った体調が裏面に張り付き
シャッフルしながらついつい見飽きない。

リタイアして元気でいられるようになり
ながらもそれなりに運動体勢の衰え方を
気付かされる老いのバロメーターもどき。

日本酒に遅れてバーボンからワインへと
好みが変わったようにギターサウンドに
目覚めたりしたのも人生の半ばを過ぎて。
(11.06.07)

遠い田祭り

さて衣替えしようとした薄手のズボンが
ちよつときついのはしょうがないとしても
メッシュのブレザーが着にくくなるなんて。

雨露をしのいできた家の外壁や下屋根など
梅雨をまえに化粧直したみたいに体型も
リフォームしないとクールビズが決まらぬ。

就業界限でのステイタスのシンボルとして
着こなされてきた背広の役割をどうやって
カジュアルで表せるかが定着の分かれ目に。

慰安旅行など平服ででかける行事のときは
女性に男性にはとても真似できそうにない
身分や仕事ぶりにとらわれない艶やかさが。

眠気を覚ますような激しい雷雨に助けられ
2コマ終えた雨上がりのキャンパスを後に
女性専用バスに乗り込んだような混み加減。

喋り疲れたみたいなの吊り革の握り具合に

iPodに詰め込んだばかりのP・サイモンや

S・テデスキ&D・トラックスが豊かに響き。

(11.06.10)

Phoebe Snow 2

愚図ついた空模様のせいばかりじゃないが
わが家の塗装工事もたついでにしまつたり
住人の体調までおかしげなことになりそうで。

ささやかなりフォームなのに事がすんなり
運ばなかつたりしたのも経済効率を優先した
その場しのぎのでまかせ言葉で請け負うから。

直したい床や内装にまで手はまわらなくとも
仕上がり具合を眺める窓からさわやかな風が
吹き込んだりしてとりあえず現状維持を保つ。

近所の見知った人たちや近親者だけじゃなく
折にふれて読んだり聴いたりしてきた遠くの
人々の訃報に読み込み聴き込み不足の事など。

手元に残った作品を引っ張り出すだけでは
なんとも物足らなさがつのつてきたりする
人とそうでない人とは何処が違うのだろう。

二人だけの暮らしも丸一年が過ぎてしまい
読むのは別々でも映画や音楽はほぼ一緒に
お互いの体調が影響しあうような事なども
(11.06.14)

玄関灯

うつすら冷房が効いた路線バスの窓越し
道路沿いのグリーンゾーンの植え替えが
緑たけなわの中休み作業みたいに映って。

ふとした心身の動きで抜け去るしかない
インかアウトか決めにくい接点あたりで
仕掛けられたここしかない出会いの岸辺。

間髪を入れず会釈を交わして相手に譲り
とらえどころのない流れに逆らわないで
乗り込んでしまう心身の動きに成れるか。

そぼ降る雨に濡れ海に向って深々と傾け
刻まれた黙礼の時間が届いた無心の底へ
手首を返して掌を合わせて下ろすほどに。

夕方に予報された雨に遭わずに帰れば
お待ちかね「HosonoYa」ライブTVで
細野氏が傘をさし日比谷のステージに。

「バナナ追分」そのほかやるじゃないか
飲み食いそっちのけで聴き惚れてしまい
玄関灯も点け忘れて部屋の外はまっ暗に。
(11.06.17)

好敵手

どこか近くで燕の雛が孵ったのか電線に忙しなく群がったり飛び去ったりしている窓の外はうんざりするような蒸し暑さに。

住宅に引き込まれた電線を選んだみたいふらふらあち向いたりこち向いたり1羽もテレビアンテナに見向きもしない。

もう要らないからと要介護になってきたおふくろの部屋から撤去させられたTVも地デジチューナーを繋げば甦ったように。

取残されたような社会の窓から入り込むいろんな情報に晒されるのが嫌になってそれともテレビのない幸せに気づいたか。

1年男子がいつの間にかやら帰ったりする中学の部活でバドを始めて試合に臨んで勝ったり負けたりした自分との出会い方。

負けた相手に次は勝とうとする悔しさも
負けた自分を相手にする練習のやり方も
終わった会場で見つけてきたか忘れたか。
(11.06.21)

下駄の音

散歩中の犬に吠えられたみたいに
だしぬけに大粒の雨が降ってきて
四つ足と二足歩行がUターンする。

似たり寄つたりの犬の歩き方より
ロープを手をしている人それぞれ
似たような道筋に同じ歩き方なく。

歩くリズムや話す声がいつの間に
まるで杵が取り払われたみたいで
背格好まで違ってくる生徒や学生。

梅雨時の人様々な歩き方の不思議
影のように何処までもついてくる
答えられないなぞなぞの問いかけ。

歩けるうちが花という一言だけは
明治生まれの祖父や大正生まれの
お袋の歩き方の違いを超えていた。

セビアン・グローバーがタップの
足裏で叩き分けるドラムセットを
i Padの楽器アプリでなぞってみる。
(11.06.24)

六月の走馬灯

リタイアしてからそろそろ十年で寝起きの真新しさも薄らぐ毎日巡ってくる誕生日の間隔も短めに。

体育館でバドを練習する子どもや教室で授業や演習をする学生らに透けて見える歳月の色合いの若さ。

年々歳々同じカレンダーの1年が生きながらえた誕生日の経過毎に大きくなる分母で割られることに。

青信号の横断歩道を渡る半ばあたりいきなり右折車に跳ね飛ばされた時誕生日迄の過去29年が巻き戻されて。

気がついたら反対車線に転がり倒れ「ドン」という音にまぎれて声もなく「お母さん」という字幕まで見えたか。

今も誰かが家族の写真や位牌を探し
途轍もない被災にまるつきり過去を
切断されたみたい瓦礫を踏み分け。
(11.06.28)

迂回路

泥濘みたいだった連日の暑さが中休みテレビに映った台風第6号の予報円が関東地方を避けたみたいで遠回りして。

ライブに出かけたいミュージシャンの稀な来日スケジュールなど確かめると北陸を避けたみたいで表日本公演のみ。

お気に入りギタリストの来県情報に耳を疑いながらもネットで申し込みチケットを手するなんて久しぶり。

食べものの好みを超えた変わりようジャズに的が絞られはじめた頃ならまったく本命じゃなかったサウンド。

本当に演奏したい楽器があったのかそれより手に職をつけて稼ぐことを願ったはずなのに横滑りして司書に。

定年手前で場外へ出られたつもりで

本命を読み聴きする気まま暮らしも
思いよらぬ時間講師に逸れ行くまま。
(11.07.22)

夏の空耳

去年の暑さをどこかに置き忘れて
始まった夏休み部活の行き帰りに
空耳だったみたいいな蟬の沈黙が。

剪定を催促するみたいに伸びた
庭木が昆虫を追い払ったような
庭の草むしりも投げ出したまま。

田舎住まいの頃にやったように
庭に草花を絶やさないようにし
仏壇に供えることも引き延ばし。

食卓に並ぶ野菜のあたりはずれ
いまさら空き地で野菜作りなど
堆肥と人糞尿の畑の草と虫取り。

先行きがすぼまるいっぽうでも
黙っていても気心が知れるから
一緒に映画を見たり音楽を聴く。

何となく始めたことが習い性に

この頃は朝の黙禱が少しばかり
無念無想に近づきつつあるのか。
(11.07.26)

あの夏あの頃

梅雨の終わりに出戻ったみたい豪雨で
なんだかおかしげな夏の夜の夢から覚め
夕立の風情など立ち消えになったみたい。

書きなぐったみたいレポートを手に
学生が「なんだか変な夏」と呟きながら
教卓に並べ置いていった前期最後の教室。

課題やレポートで重くなった鞆を肩に
教室を後にすれば「お疲れさま」の声に
「嬉しい夏休みを」と返してさようなら。

とりあえず終えたばかりのつかの間の
安堵感にひたればいいものを司書として
働ける先行きをバスで見かけた履修生に。

巣鴨の夏の二ヶ月の司書講習みたいに
お弁当や問題集などに恵まれた女手の
遠い記憶が山裾にまわりついて消え。

夏の移ろいを響かせて止まなかった蝉の

鳴き声のバトンタッチで数えた絵日記に
実家の縁側で午睡の風に婆さんの腰巻き。
(11.07.29)

耳直し

夏山の稜線がのぞく沸き立つ雲間から
遠く盛り返してきた暑さに乗っかって
庭の松の幹にも油蟬が群がり八月公演。

マーク・リボーと偽キューバ人たちの
富山ライブに圧倒されたというよりも
野外ライブの音量をクラブハウス内で。

背中を丸めるようにエッジを効かせた
ギターサウンドを響かせるステージが
PAの音圧でモザイク状に歪んでしまう。

八十人あまりの若い耳は平気のようだが
ジャズライブ会場に出かけるたび誰だか
見知った顔に出会うなんて事もなくなり。

年とともに何事にも鈍感になるように
見えていただけで狭まる許容の変化を
持て余すような戸惑いをくぐり抜けて。

コンサート後の近場で旨いウイスキーに

運良く耳疲れを癒されてから家に帰れば
寝静まる前に彼らのCDで耳直しなども
(11.08.05)

夏の対話

前期授業の学生の評価を発送し終えようやく夏休みのバカンスに出ようなんて話にならないわが家の居心地。

四カ月時間講師をやつたら二カ月の空気がやってくるというパターンで素浪人気分に舞い戻ってまた出直し。

1週間単位で朝、昼、そして午後と時間帯がローテーションする近所の中学校の部活コーチも夏の定番だが。

川釣りに明け暮れた田舎の夏休みに遡るみたいな昆虫や植物採集少年が呼吸していた時間が夏のドアを開け。

ヨメともどもリタイア後に何をするなんて思ってもみなかったあたりで思いがけぬ事態や介護の歳月が過ぎ。

窓際にやってきて鳴きはじめて蝉が

飛び去ってしまったばいつまで続くか
見えないものとの対話のはじまりが。
(11.08.09)
(60.80.11)

思出消夏

掃除ロボットも手が届かない扇風機や照明器具の埃を吸い取ったりしただけ庭の草抜きも暑さで中断し伸び放題に。

ねずみを追いかけていたりしていたみたいヌード写真を隠しておいた畳の下からつるつるした青大将が鎌首をもたげて。

お盆前が近づく前に畳を天日で干して家中を大掃除したり夏草を刈り取った遠い田舎暮らしの習慣の名残はどこに。

お袋がやって来ていた墓掃除も介護の日々で途絶えたままに引き継ぐことなく年に一度のお参りついでに済ましている。

夏戸に入れ替えたざしきに寝転がって縁側の向うに広がる青田を渡ってきた夏山の便りを読んでくれた少女の弁当。

二カ月の司書講習に通った都会の夏が

大教室から枝分かれしたように途切れ
蟬燭立てのようなスカイツリーの夏へ。
(11.08.12)

入道雲

乾いた庭木に水やりでもというところでお盆休みに入って午後の雨が定番になりこの夏の散水ホースの出番は先延ばしに。

わが家の井戸水やお花を携えJRを使って田舎の遠い親戚と入れ替わつたみたいにならぬ娘夫婦が掃除をしておいてくれた墓参り。

つくつく法師の初鳴きを耳に坂を下って待たせたタクシーに乗り込んだ遙か向うなにもかも覆い隠すような入道雲が輝く。

様変わりようをデジカメ片手に散策など墓参りの度にかつての遊び慣れた界限の暑さに負けてとんぼ返りで夏を折り返す。

狐火を見たりしたこともあった火葬場の跡形もないざわめきを擦り抜けるように遊びに農作業に行き来した山道を下れば。

十四日にお墓参りをすませておいてから

明日は家でのんびりと三回戦に進出した
新湊高校の応援を勧める運ちゃんの声が。
(11.08.16)

夏の贈物

道端のムラサキツユクサが涼しく揺れ
連日の断続的な豪雨で暑さが途切れて
朝露に垂れた稲穂を渡る風に秋の気配。

潮が引くように蝉の鳴き声も消え失せ
夏休みも後半に入った部活に顔を出す
生徒らにやや持続の手応えが見え隠れ。

学校内でほとんど頭ごなしの物言いに
晒されつづけてきているからだろうか
腰をひいた防御姿勢が常態になつてゐる。

高校を経てきた新入生と顔をあわせる
最初の教室の微妙な空気が謎だった
現状を忌避したいがための中庸姿勢も。

新司書課程教育の依頼された科目だが
先延ばししていた書類作りをそろそろ
仕上げないと締め切りの夏が終りそう。

とりあえずなんとかでっちあげないと

そんなことより思いがけない孫二人が
遊びにきてくれた時間がこの夏の贈物。
(11.08.19)

稜線歩き

先週末からあつけないような涼しきで暑さの名残をかき立てるような食卓が適度な運動をやったような汗をかかせ。

山歩きをしなくなって数十年になるが身体を浮かせる足裏感覚を呼び戻して墓参りの僅かばかりの山道の行き帰り。

新聞配達を爺婆に代わってもらって顔を見せた小学5年生の孫は雨風の日々は歩いたり走ったりしているか。

小・中・高と朝の配達アルバイトで乗り回した中古部品を組み合わせて作ってもらって買った自転車の走り。

幾つになっても抜けない夏の想いに五ヵ月になる被災地の夏との距離が解けなかった宿題のように取残され。

秋雨もどきで散歩もままならないと

快足くんなる足裏健康器具に立って
ラケットや木刀を振ってみたりして。
(11.08.23)

山びこ花火

豪雨に出ばなをへし折られないように
外出した界限が大泣きした後みたいで
デジカメを持ち歩かなかったのが残念。

バットやラケットを握ったらボールや
羽根球を打ち返してみたくなるように
デジカメを持ち歩かないと写真はなし。

何が聴きたいかはつきりしていなくて
買い揃えたオーディオ装置に促される
ままに聴き込むうちに愛聴盤も増えて。

高画質大画面のテレビにした部屋では
前月に一緒に見た映画の本数をヨメに
告げられ驚いたりするような映画漬け。

雨上がりの北アルプス連峰を目で聴き
耳で触ったりするように積乱雲が動き
午後の空に山びこが高く聳ったようだ。

この夏の川原で見失った言葉の花火を

銀河系の彼方まで追いかけて続けられる
身体は音楽や写真で引き延ばした道具。
(11.08.26)

業と技

継続者が絞られてしまったような部活だが夏休み中にクリアをしつかり打てるようになれなかったと一年生部員の言葉が聞こえ。

1時間余りしか体育館が使えない週なら部員が手分けして準備や後片付けをして練習に取り組む姿勢が飛距離を残すのに。

先輩後輩の挨拶をはじめ当たりまえの十四歳前後の気付きといったことなど往年の僕らほどには単純でないのかも。

先生や親の面に見向きもしないなんて誰にもあることで動機を見失っただけ家庭や学校をとりまく関係が様変わり。

いじめも家庭内殺人も自殺願望の因果もますます複雑で微細に高度化してしまい怒鳴れば怒鳴るほど生徒は自発性を損う。

他者に対する問いかけだけが溢れ出し

どうしようもない成り行きを前にして
どんな歯止めも仕掛けも押しつぶされ。
(11.08.30)

声と身振り

背戸の茗荷ひとつ抜かないうちに寝起きの井戸水で洗顔する触りや開け放った窓を抜ける風の心地へ。

慣れ親しんだヨメの手料理なのに味わいが身体モードの様変わりを微かに知らせるかのように深まる。

オーディオ機器の電源を切り忘れ一晩暖められたホームシアターにフクロウの冒険アニメ映画の名残。

この夏は四十本ぐらい観たなかでアニメ映画以外で面白かったのは何だったか憶えていないようだが。

引きこもり青年がこしらえた三十二のおたく的ルールを頑固に守りながらゾンビ世界をしのぐ「ゾンビランド」。

母親があつらえたルールから外れる

「女子高生の身振りや声の響きを映す
「ローラーガールズ・ダイアリー」。
(11.09.06)

海よ空よ

花持ちが良くなかった夏場も過ぎて
ヨメが買ってきた仏壇に供える花に
紛れ込んでいたコオロギを庭に放す。

伸び放題の雑草の彼方から英文で
更新作業が滞ってるホームページの
リンク切れへの対処を促すメールが。

刈取りがはじまった田圃で落ち穂を
拾うようなWebページの見直しなど
後回しにしてきたツケも先延ばしに。

引きこもり暮らしでもないけれど
当該期間の国保の給付がないから
市当局の健康優良家庭に指定され。

年度末が請求手続きの締切りだが
さしあたって出かけてみたい温泉も
これといった運動用具もなさそう。

地べたを離れて海をボートで走り

空をグライダーで飛ぶなんてのを
年甲斐もなくやってみたいのだが。
(11.09.09)
(60.60.11)

気持ちも身体も

ぶり返した日中の残暑を冷ますように
中秋の名月がほぼ半年経った被災地と
同じように見上げる足元を明るくして。

たまには身過ぎ世過ぎにかまけないで
あれこれ思いを巡らそうにも切実さが
よく伝わらない見えにくさと判らなさ。

そんな身体を届いたばかりのバランス
ボードに立たせてみれば「快足くん」で
得られなかった初めての心地よさへと。

おっかなびつくり不安な毎日が続く
足下を離れ宙を彷徨うように遠方へ
視線とともに気持ちも運ばれてゆき。

全米オープンテニス男子決勝に合わせ
早起きすれば昨年の惨敗から気持ちも
身体も入れ替えたようなジヨコビッチ。

疼いて止まない肩の痛みも薄らいで

ヨメともどもそれぞれの姿勢を育む
700×500cm 板上の山歩きの始まり。
(11.09.13)

あるかなしか

午前を過ごす二階の部屋に差し込んだ朝の陽射しが遠ざかってしまったのにそぐわないような残暑が居座ったまま。

愚痴や文句が少ない日常のひび割れか右肩の疼きを漏らすヨメのぼやきだが今週はまったく聞かされていないのだ。

長つたらしい名前を「みち山」に縮め大小半球状に混じってかまぼこ形ほか木製の支柱を並べ替えて乗っかるだけ。

空模様などにも体内の調子が左右され身体の節々の痛みなど年相応とばかりバランスを損った身体姿勢に気付かず。

首筋から肩にかけて凝りが抜け去ったあまりのあっけなさに体内も柔らかく十数年来の左肩の痛みが失せたように。

裸の王様みたいに着込んでしまったか

いつの間に着せられてしまったような
体壁の歪みに気付かない日々を過ごし。
(11.09.16)

ゾンビ前線

未完の映画を繋ぎあわせたような
介護の日々の主役が逝ってしまい
使い込まれた四畳半の切れ切れが。

ゾンビ映画好きだと画面展開を追う
面白さだけじゃなく観ている自分の
反応も合わせて眺めている面白さが。

見終われば何も残らなかったのに
スクリーンからはみだしたような
ゾンビもどきが見え隠れするから。

福島原発事故による放射能汚染物質の
数値や基準値との関わりなどの公表が
あやふやだと花火大会の中止騒ぎにも。

JR北海道社長が社員に宛てた遺書も
公表されて「敬老の日」の肌寒さが
五つの箇条書きにワープロで打たれ。

猛暑日をはさんだ三連休を抜けたら

長袖を引つ張り出さなきやならない
寒々とした秋雨模様列車が待受け。
(11.09.20)

遭遇接近

なにかと荒れ模様続きだったせいか朝から晴れ上がった秋空を身体深く呼吸するかのような立山連峰に初雪。

庭で未遭遇の昆虫を探すあてもなく接写したナメクジの画像をどれだけ大きくしたらツチノコ擬きになるか。

コムラサキやムラサキシキブを実の付きかたで見分けるように気付かず型にはまってしまった身体を脱いで。

足指で内蔵を掴むように赤ちゃんが立ち上がって母の懐に抱きついてはまだやってこない他者の影を飲むか。

体癖が隔てる間合いを見計らえたら幾つになっても叱ってくれたりした母の小言代わりになるような出会い。

相方や他所の人だけじゃなく自分を

他人のように扱えるようになるほど
身体の動きが抜け出る通り道が伸び。
(11.10.04)

墜ちた林檎

暑かった夏休みも時雨模様で終わり
後期の授業に出かける路線バスの窓に
シャッター銀座が飛び火した眺めが。

渡る橋の上手の中州に群がり降りた
鷺が地蔵のように一斉に西を向けば
カインド・オブ・ブルーがiPodから。

五〇周年記念限定盤なんてのも出たが
歿後二〇年になるマイルスをテレビで
追悼していたのが信じられないくらい。

Apple製品を使い込んでいないのに
新製品を発表していたのジョブズが
IT業界のM・デイヴィスに見えてきて。

MacBookでWindowsを立ち上げ
毎朝のニュースを開いたりiPadで
遊ぶヨメと出かけたマイルスの生。

中3だった娘がHyperCardで遊んだ

MacPlus や孫と玩具にした動かない
グラフィイトMacをどう供養しようか。
(11.10.07)

教室の秋

おふくろの介護に明け暮れた日々の
余興に使い始めた掃除ロボットだが
ひろい部屋だと作業半ばで動かない。

しまいかけたノートPCの機種を問
マックと知ってウィンドウズPCと
どっちがいいですかと学生に訊かれ。

彼女らはUnixのX端末でMosaicを
動かすネットサーフィン初体験や
UnCoverでの初検索の感動に無縁。

面白いのがマックと学生に答えたが
愛嬌があつてなにより使つて愉しく
風情もあつた家電なんてざらにない。

介護に時間を費やすことがなくなり
気分転換にもなる掃除をロボットから
わが身に取り戻したほうがいいのかな。

音もなく近寄つて教壇に差し出され

ありがとうと演習課題を受けとれば
スキップする足元に傾く秋の陽射し。
(11.10.14)

脱力散歩

なんだか衣替え時期になると体調が陽射しを乱す突風に弄ばれたようにおかしくなったりしがちな散歩日和。

市民ランナーで賑わう環水公園を避けヨメが知人からもらいうけた整理券で立ち寄った市民ホールの客席で一休み。

真夏に聴かなくなつて身体も和んでスカを弛めたロックステディそしてレゲエに乗っかる頃に体調が戻った。

スクール・コンサートだとしてもジャマイカロックスを楽しむのにあまりにも行儀が良すぎたような。

四十にして惑わずなんていうけど亀の甲のように身体に張り付いた様々な杵からどれだけはみ出せる。

五十過ぎたら骨盤を立たせるよう

呼吸できないことには支えなしで
力を使える老齡と擦れ違いそうに。
(11.10.18)

日溜まり公園

バス乗り継ぎ待ち合わせに遠くない公園に入り込んだら地面を啄んだりじゃれあう鳩の群れが陽射しを浴び。

いつせいに飛び立つ動画を撮ろうと踏み込んだ足音も無視されてしまいまるで体育館に群がる中学生みたい。

水音のする池を覗けば餌付けされた錦鯉が音も無く足元に寄り集まって何やら質問してくる女子学生のように。

いまどき体育館や教室を見渡しても異議申し立てをしなきゃおられない若者の姿が映り込む気配はなさそう。

「ウォール街を占拠せよ」だなんてモバイルデモが日本にまで波及する受け皿世代が生息する余地があるか。

電柱のカラスの頭上じゃトンボが

人気の無い公園の樹上に旅客機が
デジタル写真に写り込んだりして。
(11.10.21)

身近な愉しみ

冬場を迎える雪囲い作業だけじゃなく
自転車やスキーなどのアウトドアほか
災害時などにも使える防護帽子を新調。

冠って遠出どころかこの秋にめでたく
開店十周年を迎えた近所のイタ飯屋に
出かける二人の愉しみも先送りのまま。

月々水の午後は近所の中学生の部活へ
木曜はバスで市内西部の短大の教室へ
空いている週末の愉しみはわが部屋に。

リタイア後に近所でジャズライブなど
足が運べるようになって期待していた
ライブハウスは店を閉めたままみたい。

使っているPCのOSアップグレードも
手持ちの資料やら教材などを用意する
ソフトなどが動かすどうにもならない。

虚弱児の成れの果てのような体力でも

衰えを受け入れるような躰の使い方に
ようやく気付きがあれば老いも愉しみ。
(11.10.25)

日々踏む不安

秋の行楽案内には見向きもしない毎日だが
ネットやCDじゃなく生で聴きたいバンドの
来日公演チケット抽選案内に応募しそうに。

路線も空路も道中が乱れやすい二月初め
後期授業の期末評価提出時期に重なるから
北陸地区でのサプライズを待つしかないか。

前期に続いて後期も履修を届け出ている
教務に確かめたら体調不良らしかつたが
未だに教室に姿を見せない空席が鈍色に。

司書資格を手に図書館の狭き門をくぐり
正職員になって同僚から一目置かれても
利用者が認めないことには司書じゃない。

晩秋の山肌に高度を下げる旅客機が映え
娘専用路線バスみたい混み具合の帰路で
行く手に夕陽が反射して中也詩の輝きが。

「町ははやぎてありぬ

子等の声もつれてありぬ

(11.10.28)

しかはあれ
うすらぎて
この魂はいか
空となるか?」(中原中也)

猫と老人

庭で小動物を追う猫も見かけなくなつて遠く今年一年の幕が下がり始めたように山肌のグラデーションが聳え立って見え。

高校時代に拾つた猫と死別して飼わず嫌い見かねたヨメが写真集を買つてあげるほど猫好きだつたお袋の晩年にも猫は添わせず。

散歩で出会つた猫の写真を撮つてみたりネットで気に入つた猫の絵を取り込んで飽きず眺めたりしていた描き手の映画が。

米国生まれ收容所を経た日系二世であるニューヨークの路上暮らしホームレスの描いた絵の猫に懐かしいような見覚えが。

老いた日々の身近なかけがえのない慰め軍国青年の戦後を生きぬいてきつつある詩人・思想家が愛おしんだ猫との別れも。

孫が落つこととして壊れた前足をくつつけ

母の忘れ形見のようにお手をする小さな
猫の置物が部屋の隅っこで別離を惜しむ。
(11.11.01)

近道

惜しみたくなるような秋晴れに浮かぶ
晩秋の山肌が続く山道の上り下りなど
出かければ体調も何とかなりそうだが。

新築成った小学校の体育館で一年ぶり
ネットを挟んだ打球音に躰の衰え方を
補うような打ち方が技となって響いた。

結婚十年で冷めきった夫婦が祖父の
葬儀の帰り動かない車を降り迷った
山道を辿る二人の心身の展開ドラマ。

二人道中にどんな気付きがあったか
一度だけ尾根筋を辿って山小屋まで
ガールフレンドと上り下りしたときに。

行き帰りをショートカットするみたい
みち山にほぼ毎日乗っかっている
無意識に自問自答する体内でやりとり。

絡めとられる澱みや力みを脱ぎ去れば

不安定だからこそ骨盤の締まりも良く
立ちつつある姿勢に呼吸も深くなって。
(11.11.04)

立冬

リットウという響きを曲線に撓ませ
あたりの木立の枝が露になるように
枯葉が太陽エネルギーに別れを告げ。

さすがに文庫本は並んだりしてない
この頃の図書館の新着案内に新書が
業界の抜け毛みたいに貼付けられて。

ミニ三脚をポータブル三脚に新調し
ひっくり返ったりしないデジカメの
クリアな画像に追いつけない被写体。

デジタルハイビジョン技術を縦横に
使いこなすテレビ番組を当てにして
買い替えたテレビで観ているものは。

ゴジラ映画みたいに座頭市を楽しみ
地べたから薄らいだ故郷の痕跡など
拾い集めるように古い邦画を見直す。

電子書籍に読みたいものがないから

テクノロジーの里山で遊ぶがごとく
土間の埃塗れの文学全集を並べ直す。
(11.11.08)

六十の手習い

秋の終わりに催されがちな同窓会をいつも見送らせてもらっているけど、愉快的な授業をやった先生を思い出す。

前日の疲れが残っているようでなく、よくない天気の子でもなく、何故か場数を踏むほど授業やコーチが嫌に。

我に返つたらとても交信不能としか思えないのに続けたりしているから、十三〜四歳の子どもらがETに見えたり。

お喋りがどう伝わってるか解らない教室の学生だってクールというより、無反応としかいいようがなさそう。

老いぼれ体内時計と若い体内時計が共鳴するような話のネタなんてのは、教科書のどこを探しても見つからず。

まず人としての挨拶がやりとりでき

与えられた当面の目標に向け励んで
より遠くの折り返し点に気付くまで。

(二・二・二・二)

山の端

つかの間雲の切れ間からのぞいた
山肌の尾根筋あたりを辿ってみる
季節を変えて移ろう朝陽の登り口。

風呂場も冷暖房するようになって
ぬるめ設定で年中変わらぬ湯温に
夏から冬へと湯量を変えてみたり。

銭湯の行き帰りも落ち着かなくて
もらい風呂していた田舎から街の
団地の一軒家に越したばかりの頃。

屋根からすぐ空が広がるばかりで
夕陽が沈むねぐらや月が顔を出す
山の端がどこにも見当たらなくて。

郊外に新築した一軒家に移り住み
数十年を経てリタイアするまでに
月日の数え場所を彷徨ったことも。

積んでは崩す書齋の本の佇まいや

リスニングルームで積み重なった
音響装置に田舎と街の住み心地が。
(11.11.15)

縁側から、みち山まで

数日前に初冠雪した山並みに立ち止る歩道橋の真ん中あたりがなんだか街の新築家屋から消えた縁側の眺めみたい。

虚弱で五歳になつてなんとか立てた夜中の縁側でのおつかなびつくりな姿勢に間違いでもあつたのだろうか。

老いにさしかかった印みたいな痣が消えるように肩の疼きだけじゃなく万年雪みみたいな痛みもなくなりそう。

起き抜けの持病と化した腰痛からも解放されそうなくらい首の辺りなど柔らかくなり後頭への凝りも抜けて。

家族の抜け道として見直したように縁側を増築してつないだ納戸の上は書棚を作り付けた書斎の居心地よさ。

古びた建具と柱に隙間ができてきて

安普請のツケが回ってきたようだが
居ながら部屋の外に通じる軒端感が。
(11.11.18)

吊り天空

近所のコンビニで時限付きライブチケットを受け取りにゆく出足をためらわせた雨も止み庭で傘干しついでに棒など振り回してみたが。

自転車やスキーなどの右回りと左回りで違う感じがしていた身体の偏り具合も薄らいだか抜けたみたいなの寝る前の骨盤体操の繰り返し。

今朝も『富士日記』が夫婦の話題になったが体幹に業務報告を書いては消すような動きのメモみたいな日記が書いたら面白いだろうに。

いつどこで何をしたぐらいをメモっただけで毎日なにを食べたかは途切れてしまっている手帖日記の次年度版にどんな気付きがあるか。

映画で観たワンルーム型移動式住宅の暮らし向きは土地所有とは違い定住を仕切らないで公私をひっくり返すように日々を過ごすのか。

釣れない川の土手でひっくり返ったりすると

流れる雲の上からか下からか眺める居場所が
消えてしまう午後を過ごした遠い少年の帰路。
(11.11.22)

紅葉忘れ

冷たい風雨に出足も鈍りがちな昨日は
アフター5のライブを楽しみに出かけ
O r g ・ + g ・ + D s ・ のトリオ演奏で温まる。

数十人のこじんまりとした会場までの
人間を顧みること無く敷き詰められた
市内の紅葉名所の落ち葉が街灯に濡れ。

二度目のギタリストの人相を見間違っ
うほど西海岸から東海岸までサーフィン
してみたにプレイもホットになって。

最初に聴いた近所のライブハウスから
場所を違えてデビュー十年で節目の
セカンドセットに出会えた巡り合わせ。

双眼鏡をやおらデジカメに持ち替えて
好みのミュージシャンの節目の響きを
撮るみたいに眺めた瞬間を録り逃がす。

予備の眼鏡買いを先延ばしするうちに

曇りが出たみたいなの使い古し双眼鏡を
デジタルに買い替えた眺めはどうなる。
(11.11.25)

落ち葉の裏書き

十二月に入ったからといって何も急に人が変わったみたい寒い。だなんて平年並みを失念したな。

桜と銀杏に挟まれた公園の並木道週に一度ばかりバス車内から眺め通りすがりの見ごろを逃したのか。

庭など見ても今年は独り立ちから逸れたみたいに成熟を拒んだまま季節をやり過ぎたみたいな紅葉。

体育館で運動する小・中学生にも教室で授業中のこの頃の学生にもいつも思い知らされるような眺め。

仲間はずれにならない範囲でしか頑張れないような持続のメモリにどこで誰が感受性をコントロール。

十年一昔を吐き出すような岸辺に

ようやく立てたとしてもお節介を
權にして贈与の海へ漕ぎ出ないと。
(11.12.02)

回文番組

かすかに舞い落ちる楓や銀杏の葉は
そんな音がしないが櫂に吹く風で
舞い落ちる乾いた響きに季節が流れ。

これまでとこれからの時空を撫でて
枝を離れ地面に落ちるまでの一時に
さまさま曲面が現在に散りばめられ。

NHKの「談志が死んだ」追悼番組で
やってくれた「芝浜」を見たりして
わが家のDVDの出番がまた遠のいた。

週末の落語番組を欠かさず録っても
もう聞けなくなった枕話の代わりに
『現代落語論』など引っ張り出して。

手持ちを全部聴き直したって師匠が
声帯切除を拒んでまでいった誰に
向け語り続けようとしたのだろうか。

デキシーランドジャズみたい饒舌で

誰でもない誰かみたいな誰かに向け
ウツダイ・アレンの映画のようにか。
(11.12.06)

柔らかか背筋

手と顔のどちらをより動かしているか
朝の洗顔が井戸水からお湯になっても
洗面所を使った濡れ具合が左右され。

迎えた朝によつて立ち上り具合が違う
線香の煙のような背筋の撓りを支える
骨盤の座りの良さで立てた幼児記憶へ。

脳に届けられた五感はどう意識されて
どのようなパターンに圧縮されたかが
記憶されていないと思いだせないのか。

肩が凝って詰まって滞ったのを感知し
痛みや疼きの身体的一次情報が失せた
状態になって感受する身体的零次情報。

アナログとデジタルとの写真の違いは
同じような風景を眺めれば眺めるほど
圧縮できるかできないかの違いにある。

読みとった中身が違うさまじまな本も

書誌事項を取り出して二次情報化して
目録にしてしまえばどれもこれも同じ。
(11.12.13)

足指散策

囲炉裏と火鉢と行火と湯たんぽで冬をしのいだ田舎の子供のころが忍ばれる冷たい廊下や縁側の素足。

寒くなると無意識に両足の外側で歩く癖が抜けなくてまたやつてるなんてお袋の音が訝しそうな仏間。

座りながら足の運動をやらせてもほとんど歩けなくなった足の爪が丸くなって両端が指に食い込んで。

箸を持たないときは鉛筆メモなど手近な裏紙に物差しで線を引いて高校野球中継のイニング得点記録。

五感から脳に伝えられる情報量の数十万分の一角が意識化されるなか手や足の指をどのように使い分け。

届いたばかりの甲野氏のDVDにも
出てきたみち山で戯れるうちに
裏山や川原遊びの足裏感覚が戻る。
(11.12.20)

ハコの出入り

はぐれムクドリが凍ったように動かず
薄ら積もった屋根雪が昼近くなっても
融けなくなつてくると庭先の融雪準備。

駅前広場にたむろしていた鳩どもが
渡り廊下みたいなアーケード屋根の
両端の梁にびっしり群がつていたり。

さまざまな年代の男女が群れる良さが
高校を出たばかりから頭のはげかかった
学生まで集っていた夜間短大の三年間に。

路線バスの乗り継ぎがうまくいかない
時節柄とはいえ一コマ分の時間をかけ
教室に出かけるのもまんざら悪くない。

問題集だけじゃなく弁当までもらったり
東京でのたった二カ月の司書講習の折も
受講生の自宅に泊まりがけでよばれたり。

人前で話したり書いたものを見せたり
気恥ずかしさが避けられない場所へと
入り込んだり出てくるための道中時間。
(11.12.23)

煤払い

朝のお線香をあげようとしたら
仏壇の引き出しがあいたままで
覗いたら名刺判の古写真が3枚。

懐かしい縁側を背に祖父が杖を
ついている傍らの細い松の木は
引越しの際に移植して今も元気。

家族ともども過ぎした部屋など
煤払いなどしたりしているのに
薄らぐどころか年々歳々鮮やか。

掃除ついでに普段は滅多に手に
しないLPレコードを取り出せば
買った頃の事なども響き渡って。

今年も町内に新築家族が加わって
育て育てられる部屋じゃ片手落ち
介護の部屋を待って家は完成する。

煤払いどころか看取ることもない
消息に晒され続けたまま持ち堪え
払えぬ〈隔たり〉ばかりなりけり。
(11.12.30)

顔なし

空模様を眺めながら初詣も初滑りも先送りして家でお節を着に飲んだり映画や音楽のつなぎみたいに読書も。

身体を洗って風呂で暮れの大掃除をしめくくつたのに手足などに疱疹が出てむず痒さを持ち越してしまった。

晦日にヨメと街中に出て正月用にと買ってきた食べ合わせにさし触りがあつたなんて思えないくらい旨くて。

ネットでお節の試食品なども取寄せ味わったりしたが馴染みの寿司屋に配達してもらった重箱の中に落着く。

元日に訪れた娘ともども何事もない普通を枕にトキがタツのを愉しんで新年を迎えられれば言うことはない。

昨年あたりから露になったようで

さまざまな局面に蔓延る隔たりを
のっぺらぼうにする圧力に耐えて。
(12.01.03)

橋と冬鳥

正月の休みモードから身を起こして
昼時を跨ぐ春休み部活に顔を出せば
アケオメやコトヨロに迎えられ。

言葉を呑み急いではしよつたみたい
ゴミ集配所に折り重なる酒瓶の山を
数えるように雪が降り積もってきて。

年賀でもらったお菓子の名から知る
自転車散策で馴染んだ松川に架かる
七つの橋が南北に通わせていた名前。

買って読んだ本を著者から献本され
夫婦で重複購入してしまったCDなど
棄てがたい品々を喜んでくれる氏名。

逃亡の橋桁を数えながらくぐり抜け
十七年ぶりに出頭してきた容疑者など
とっさに見分けられる勤め人の顔付。

しめ飾りを数えたりした行き帰りに
行き先が知れず飛び去る冬鳥が鳴き
架け損ねた橋に言葉を仮橋に渡して。
(12.01.06)

時を着込む

凍てついたような川原の立ち木や鉄塔でじつと動かない鳥の姿から藁靴や雪下駄の遠い時間の面影が。

寒さ続きで防寒ブーツを新調したが保温性の高い化繊物の下着も替えてアレルギー性皮膚疾患を治さないと。

正月酒をのめるだけのんで近所の皮膚科に出かけたら酒だけじゃなく摩擦しやすいスキーも控えるように。

スポ少や部活の子どもらや授業時の学生らにうつつたりしないものだと確認できたがオマケももらうことに。

動植物的なものから化学的なものへ衣食住の生活時間の変化が時として身体に蕁麻疹みたいに現われるのか。

農耕的な春夏秋冬の暮らし向き深く
ものごころに刷り込まれてしまった
時間感覚とせめぎあう都市の暮らし。
(12.01.13)

骨休め

朝早く立山山麓スキー場の空あたり
晴れ上がってきたのがうれしいほど
初滑りは皮膚疾患が治るまでおあずけ。

近所の皮膚科で処方された塗り薬と
飲み薬の併用で症状が良くなるほど
化繊アレルギー抵抗力は身につくか。

顔や身体の関節あたりに症状が残り
薬や断酒を止めても再発しなければ
大丈夫ということなんだろうけども。

巻き添えを食らったみたいに飲酒を
自粛気味のヨメにジントニックなど
作ったりしても欲しがらない自分が。

痛い痒いで眠られそうにない左手を
右手はどう感じているのだろうかなど
両膝や両肩や股関節の連動を夢見て。

晩年に身体の痛みを訴えること多く
祖父やお袋が嘆いていた頃の想いが
様々な層をなして冬景色を吹き抜け。
(12.01.17)

暗箱

まあ一杯ぐらいならいいですよなんて
医者のお許しで1週間ぶりのワインが
おいしく感じないのはどうしてだろう。

右手でラケットを振り抜き出す身体の
左手や肘の扱い方や両足で滑り降りる
斜面で両腕のバランスや杖の握り方を。

気力も体力も落ち目になってはじめて
まだ残されている力を力まず滑らかに
発揮する面白さに気付かされたりして。

選択制とはいえ司書科目の後期めがけ
ドロップアウト履修生が目立ってきた
なかに体調不良による離脱者がいたり。

他県からやってきた学生だったようで
クラス担当教官から言付けがあったが
履修取消届けの文字が細かに震えそう。

はるか窓の向うの冬木立ちで越年した
枯葉と見まがうばかりに枝から枝へと
群がり動いている鳥の鳴声は聞こえず。
(12.01.20)

気まぐれ雪

市内を二分する河川と丘陵地をまたぎ
路線バスで往復したりすると西と東で
積雪が随分違って渋滞予想も外れがち。

皮膚科と歯科のハシゴをした近所の
幹線道路は圧雪ででこぼこしていて
融雪装置のある生活道路を選び歩く。

歯の被せ物がぐらついて抜けそうで
そのうち治療などと構えていたら
歯ごとぼろっと抜け落ちてびっくり。

痛みもなく外れないようにしていた
食事時の感覚なんてどうでもよくて
的外れの思い込みに頼っていただけ。

十数年悩まされた左肩の痛みが消え
長年使い続けてなにごともしなかった
化繊の浴用タオルや下着アレルギー。

心身感覚に頼るといふよりどうして
生活感覚をやしなうかで人それぞれ
喜怒哀楽の感じそのものが違いそう。
(12.01.27)

雪かき

「よく降りますね」を挨拶代わりに断続的に1週間降り続いて中休みの晴れ間にあちこちで高齢者の除雪姿。

滑り落ちた屋根雪が小屋根に届き埋まって見えなくなった雪囲いや冷暖房用の室外ユニットの雪かき。

戸別負担で融雪道路が普及したが男手の足りない家族の除雪作業を地域で助け合う習慣は溶け去って。

老人のいる引き揚げ寡婦家族へのいじめもあったが貧乏なるが故に隣近所が助け合う豊かな関わりも。

高齢者の住まいの雪下ろしなども一升瓶ぶら下げたお礼で済んだがこの頃は1時間3千円出さないと。

三反百姓の農作業から縁談までの
手助けや配慮もあたりまえの如く
お返しなどひとつもなさぬままに。
(12.01.31)

帽子に杖

持ち越した除雪疲れを解すように
差し込んできた朝日に輝きながら
あちこちで着雪が舞い落ちてきて。

払い落とす庭木の綿帽子が重くて
暖冬続きで縮小均衡の吊り具合の
庭木の雪吊りの支柱も傾いてるが。

雪吊りなども業者任せにしなかった
祖父の冬の出で立ちといえば帽子に
マントを羽織って杖を手に使っていた。

三八豪雪の頃にどこか名残があつて
真冬日ならずとも世のお父さんの
通勤姿にまだ帽子を見かけたもの。

背広やネクタイに縁が無かったが
色褪せた祖父の中折れ帽の下には
祖父の生きた明治・大正・昭和が。

竿竹で庭木をはたきながら響くか
手ぶらの外出を嫌がったみたいな
祖父の杖に仕込まれていた何かが。
(12.02.03)

噛み合わせ

もうスキーに行ってもいいよという
お言葉で皮膚科通いもおしまいが
初滑りを先延ばすように降り止まず。

歯が抜けて通い始めた歯医者の方は
ガタついてる歯の治療も必要になり
近所の寿司屋行きも間遠になりそう。

われながら口蓋内の順応性が良くて
五本まとめかぶせた仮歯が馴染み
人工物を加え込んだ違和感も薄らぐ。

ヨメが気を利かす料理も柔らかさそう
なのに噛むとなると治療中じゃない
片側に片寄ってしまったような癖が。

人それぞれ齧り続けなきゃならない
日常に何も起こらないのがとつても
いい噛み合わせとなるような日々。

数少ない歯で食べ続けた母の介護を
いささか齧ったりした事もあったが
憶えのない父の介護は見当もつかぬ。
(12.02.10)

配架作業

予報外れの昨日の昼前からの好天気が大間違いだつたみたいにいま・ここを埋め尽くさんばかりに降り積もる雪が。

スキーやサイクリングは4〜5時間もあれば充分愉しめるが一本の映画だとちよつとどこかへ旅したような気分。

昨年暮れから録り置いた長尺映画の『ヘヴンズストーリー』を見終わり家族のいま・ここが聞こえてきそう。

後期授業絡みで評価表の提出も終えどどこか為にする読書から解放された平川氏の新刊2冊が合わせ鏡のよう。

3・11以後の経世済民を考える志と父の介護とが糾える縄のごとくにいま・ここをあぶり出し語りかけ。

点と点をつなぐように線引けない
生と死を並べて閲覧できる書棚の
文学のあたりに配架するでしょう。
(12.02.17)

ほどほどに

スキーに出かけたくなるような日もなく
二月半ばも過ぎてようやく冬の天蓋から
日差しが漏れるようになって庭木も一息。

屋根から滑り落ち縁側や背戸をふさいだ
除雪もそこそこ晴れた界限の散歩がてら
二人だけの寿司屋で一足先に春を味わい。

長引きそうな歯の治療の合間に愉しんだ
食のひとつのあとは由紀さおりの声で
配膳された一九六九年ヒット曲がデザート。

一気に禁煙したり二年ほど断酒できたり
歯茎の麻酔後の痛みも鎮痛剤に頼らずに
やり過ぎすうちにどうでもよくなりそう。

あれほどのこだわりをどう通り抜けたか
なければないであればあるように付かず
離れずおのずから身のほどが立ち行けば。

狭い部屋での木刀の扱いが俣ならずとも
雪かきは三度目位から腰や身体の節々が
あまり痛んだりしないような捌きを覚え。
(12.02.21)

読み人いずこ

しつとりした雨が降り出してまもなくもやつとしたあたりの雪の原っぱから薄ら立ち上つてくる春一番の前ぶれが。

融雪雨とくせつうと融雪霧とくせつきりとの違いを見分ける沈黙の吐息を肉声のように聞き分けたら冬モードの身体から抜け出てしまえそう。

かろうじて生き残ってる校下バド仲間と袖擦りあうようなゲームを愉しんだ晩に幼かった頃の友だちの事など浮かび消え。

疾病利得などあり得ない季節感が漂った大野更紗『困ってるひと』は難病女子の闘病記の書棚を突き抜けていま・ここへ。

追・再試課題提出が半数を切っていた自称本好き司書課程選択学生の目線は大正期以前に触れたりする前に巣立つ。

二百万冊もあるといわれる明治以前の
書き物の1パーセント余りしか今様の
母国語で読めないという神保町に佇む。
(12.02.24)

冬場を愉しむ

昨日みたいに歯医者や部活の予定もなく見事に晴れ上がった冬の朝を待ちかねたみたいに車を呼んで近くのスキー場まで。

歯科の医者と技工士の夫婦が二人三脚で営む近所の歯医者立ち姿と違うけれどいつの間にもやらスキー仲間が夫婦だけに。

シーズンオフのバドミントンにしたって二人とも冬場を愉しむ体力を保てるよう続けてるだけで自在な上達にはほど遠い。

季節外れの真冬日みたかった立山山麓の上質ゲレンデで何組か夫婦スキーヤーが中高年のキャリア・シユプールを読ませ。

斜面の分岐点にあって旨いコーヒーやビーフカレーや山菜漬などシーズンを味で繋いだ小屋を眺め起こす跡形なし。

筋肉疲れより初滑り感が勝ったような
デジタル双眼鏡で撮ったゲレンデ姿を
PC画面に映せばヨメの笑いを誘い出す。
(12.02.29)

何食べたい

近所の屋根雪の残り具合が様々でも月が変わったとたんにあの大雪などどこか忘れ去ったみたいな暖かさが。

カニ漁に取って代わった蛸イカ漁の点滅するLEDもどきのテレビ画面にワケギを添えた酢みそ和えが重なる。

北陸の冬の味覚のほとんどをヨメが愉しませてくれた食卓からこぼれたアンコウ鍋にようやくありつけたが。

冬場も食堂メニューに冷や奴を置き続けてもらったりしたがことのほかウニにもアンキモにも相性が良くて。

まだ解しきれない運動疲れのような割り切れなさを纏ったみたい心身を賄い続けてくれる食卓があればこそ。

おんぶにだっこで食いつ逸れもなく
お昼に鴨ネギと穴子と稲荷うどんの
どれがいいなんて迷ってしまいそう。
(12.03.02)

店じまい

出歩いたら雨に濡れるというよりも大雪の跡を消し去るようにあたりあたちこめた雪融け濃霧にぐっしょり。

学科の懇談会に出て嬉しかったのは司書科目をとった卒業生の数名だが公共図書館でほぼ働けそうな運びに。

若いクラス担任教官がかいがいしく煮えた鍋料理を小鉢に取り分けたり年に一度の合席を男手が繋ぎ合わせ。

学科の年配者と若手のパスワークが自在に回るように時間講師の後釜に狙った人材が先輩講師に先を越され。

四十年前に引越してきてから家電のおつきあいが続いていた小売店からこの三月いっぱい店じまいの挨拶。

焦土となった戦後の市の中心部から
生活を復興する働きを示した大人の
指標の後の世代が実感する価値観は？
(12.03.06)

ちぐはぐ

数年ぶりの歯の治療が長引いて
上下の歯ぐきの老化の具合だが
どうやら天地の違いがあるのか。

歯科の予約日がスキー日和になる
めぐりあわせの日々を数えながら
シーズンも残り少なくなってきた。

ある程度の繰り返しがないと滑る
技の気付きも少なくなってしまう
現状維持そのものが途切れそうに。

出かけられたとしても夫婦ともに
とても以前のように滑りこなせず
互いの衰えを確かめ合うことにも。

来週あたり雪になりそうな予報に
コンディションのいいゲレンデを
期待しないではおられないのだが。

さしあたってできるかぎり愉しみ
夢中になって空っぽになるような
ひと時を暮らしの中で保てないと。
(12.03.9)

雪衣

まだ片づけるには早すぎるのに
先週末の雪をともなつた春一番で
背戸の雪垣が呆気なく吹き倒され。

落ちた屋根雪の押さえも消えて
軒端に立てかけた4本の柱ごと
引きはがされるなんて久しぶり。

裏返された上に積もつた新雪で
重くなってヨメの手をかりても
引き起こすなんてとてもできず。

4度目の大雪はなきそうだから
とりあえず柱から板を取り外し
軒下に立てかけるようにしまう。

瓦礫を覆い隠した雪が融けても
一向に片付きそうにない東北に
春を先延ばすような寒波だが。

久しぶりに読んだ詩集の中から
3・11を弔うかのように舞い落ち
血汐の中まで雪は万遍なく降る。
(12.03.13)

お疲れさま

シーズン2度目の日帰りスキー帰宅後
NHKの7時のニュースに思わず夕食の
箸が止まってわけもなく涙ぐみそうに。

十数年前の夏に吉本さんが溺れて重体
のニュースに著作でしか知らない人の
死におそれおののく我が身に出会った。

この日を迎える練習など糸井さんだけ
とても真似られないからさしあたって
ネットで手当り次第に訃報を探したり。

吉本さんが好んだらしいジャガイモの
ソース煮込みやレバカツじゃないけど
ヨメの手料理を肴に立山を酌み交わす。

三歳で父を亡くし育て上げてくれた
母の死に際に思い知らされた不在の
父の死がもたらす父性との別れとは。

ありがとうございますいましたなんてまだ
いえないくらいとまどうだけだから
ありがとうございますすと口ごもって。
(12.03.17)

越せなかつた冬

寒さがきびしかった冬の名残り雪が消えるのを待ってみたいに庭師が雪吊りを外して片づける手際によさ。

吉本さんを悼む記事が載った夕刊や朝刊を各紙取りまとめ横浜に住む知人から送られてきて元気づけられ。

昭和の終わり時もスキー場にいたが望みどおり昭和天皇より長生きでき親鸞の九十一歳に近づきつつあったのに。

二十年前の書家との対談が本になって届いたばかりのページをめくっても著者と呼吸するいま・ここは何処に。

スキーからサイクリングへ乗り換え半製品のクロスバイクをできるだけ日にちが過ぎるように組立てながら。

新著の書誌事項を吉本著作リストに
アップデートし続ける日々の終焉を
猫々堂主人の吉本資料集が越えゆく。
(12.03.20)

試し乗り

不安定な季節の空模様を伺いながら組み立てが終ったばかりの自転車であたりを走れば梅が膨らみ鶯の音が。

木製のラケットをスチールにしたり単板のスキーを合板に履き替えたり三十年乗ったサイクリング車との違い。

クロスバイクの組み立て中に無理な体勢で作業したつもりはなかったが組み立て終わった晩の運動で痛みも。

内申書に部活歴を残す以外のことはいっさいやろうともしない子どもや追・再試も試さない学生が目立った。

クラスの大多数が塾で勉強してるからじぶんはしなくていいと突っ張っても現場の誰が本気で受けとめてくれるか。

家庭や学校を尻目に未踏のロードへ
最低限の出席日数と60点ぎりぎり
が
努力の限界みたいな調整済みギアで。
(12.03.23)

冬の出口

融雪ホースはとつくに片づけたが朝方の通りすがりの雪化粧の庭でとまどうように鶯が鳴いたりして。

春分の日を過ぎたあたりの朝陽が二階の書斎の窓から差込んできてようやく身体が越冬気分から抜け。

過換気体質と入れ替わったようなこの冬の化繊アレルギー体質だが鼻炎は免れ風邪もひかない日々に。

冬もお袋の在宅介護をやってから灯油と電気のハイブリッド暖房で乾燥し過ぎない冬越しを心がけた。

新聞から週刊誌へ追悼記事が移り風邪をこじらせたみたいな肺炎で亡くなった吉本さんが惜しまれる。

堆く積もった庭の残雪も跡形無く
何時でも何処でも吉本さんの背が
見え隠れしていたような安心感も。
(12.03.27)

空き地めぐり

製氷皿を傾け不揃いの区切りに均等に井戸水を流し込むうちに端っこから溢れるようにこぼれ

メジロどころか雀も見かけない電線が揺れる曇り空に煽られて飛んでいるのはカラスばかりに

とつくに昆虫が消えた侘しさもあたりまえみたいに眺めていた空き地に家を建てる槌音が響き

久しぶり夕飯前の自転車散策で急ごしらえの介護施設ばかりか空き屋となった住宅も目立って

ギアをローに入れ替えた先では夕陽に染まった残雪の山肌遠く野焼きらしき煙が春霞のように

写したい風景に出会わなくとも
田畑に沿った二本の道路を繋ぎ
砂利で埋めた更地を抜けてみる。
(12.03.30)

春嵐

朝から南風が吹き荒れ放題で
近所の中学校の体育館までの
行き帰りもまつすぐ歩けない。

隙間風が気になる築四十年の
我家の二倍以上の年輪になる
剪定済みの庭木も揺れが凄い。

ガタがきているけど新築時に
防音を施しておいた部屋なら
暴風や雷鳴もさほど感じない。

収集ゴミが道路に飛散したり
低気圧が被災三県に近づけば
未処理の瓦礫も飛ばされよう。

被災地とそうでない地域とで
二分されたみたいな色分けは
事故後の汚染に対する恐れに。

わずかでも危険性が残るなら
万が一はないということから
なんでもありに切り替わって。
(12.04.03)

接続不良

急遽FAX受信が必要になって
気付いた手持ちプリンターの
機能設定で接続を済ませたが。

昨秋から一年部員がサボって
近所の中学バド春休み部活が
冬眠から冷めない動物みたい。

先輩部員たちや顧問の先生も
そ知らぬ顔だがコーチすべき
相手がいなくなればおしまい。

五年前に女子部員に頼まれて
続けたが後輩部員が皆無では
今年度の電話依頼に応じない。

武道の必修科目化をいう前に
子ども自由な意思力発揮の
場となる運動部活の見直しを。

FAX通信が駄目だったようで
近所のスーパ―へ出かけたなら
未受信記事の掲載誌があった。
(12.04.06)

追悼

桜の開花も遅れているようだが
朝方に小雪が舞ったり自転車に
乗れば天気雨に見舞われそうに。

週刊から月刊誌へ移った追悼文を
図書館だけでなく近所の本屋でも
手に取れなくなった文芸誌の距離。

いま・ここに生きて在るがままを
昭和三〇年代の末に雑誌で出会った
吉本さんの文体で肯定されたのか。

小六からバイトで小遣いや学費の
たしにもならない様なことを続け
神武景気の右肩上がりの後押しされ。

戦後の経済成長が底をついていた
札幌冬季五輪や浅間山荘事件など
遠く眺めながらどうにか所帯持ち。

子育てを終えた先に待受けていた
母の在宅介護を中断させた死から
始まった朝の黙禱に新たな深まり。
(12.04.10)

三回忌

遅まきながら桜がほころび始め
梅やコブシが咲き揃っていたり
予報とは大外れの眩しい日和に。

お袋の満中陰で数少ない縁者や
檀家のお寺さんとかかわりも
途絶えてしまっている仏間の朝。

仏壇の花器から溢れそうな花に
好物だった煎餅を供え二人とも
お経はできないからiPodで代行。

葬式の次の日に授業に行ったり
費用を義援金に回してしまつて
一周忌を営まず不義理を積重ね。

始まったばかりの授業2コマを
済ませて帰ったバス停でヨメと
待ち合わせ近所の寿司屋で寛ぐ。

お土産にお袋の好物の巻寿司を
仏壇に供えて手を合わせた傍ら
お昼にヨメが供えたどら焼きも。
(12.04.13)

架け替え

春の小鳥が弾丸のように飛び
この冬の積雪に耐えた庭木の
八重桜や木瓜が一斉に花開き。

バス乗継ぎ待ちに花見がてら
街中を横切れば土手も丘陵も
分け隔てなく一斉に花開いて。

一年前の自粛騒ぎが嘘の様で
昼前だというのにこの人出は
行き場を見失った花筏のよう。

被災地でパチンコ屋と風俗が
儲かっているみたいに茶屋が
繁盛し遊覧船が花影を散らす。

咲き時や見所を見失いかけた
この春の身の程を切るような
夕暮れの風が吹き過ぎる川縁。

夜桜見物の賑わいをよそに
満員電車や満員バスを渡し
続けた大橋は架け替えられ。
(12.04.20)

花見鳥

週末の朝つばらからうるさい
キジの鳴き声に送り出されて
街中ではなく山裾の桜名所へ。

スーパーマーケットに立ち寄り
買物休憩してからがきつくなる
爺婆サイクリングのペダル漕ぎ。

相容れないからこそ隔たりを
計って互いに速度を合わせる
男女の歩み寄りが自立の原点。

海拔30mの庭先から一走りだった
120mも高い土手の松並木に連なる
こじんまりした桜並木が今年はずい。

耕耘機が唸り始めた田圃の上で
ヒバリの初鳴きがこぼれるのに
残雪の山肌に姿を隠して見えぬ。

桜花に群がる嬉しそうな小鳥の
鳴声に望遠レンズを向けたなら
花枝の裏へまわって写させない。
(12.04.24)

復興前線

なんだか今年の春は風が強く
街中を通れば店先の鉢植えや
駐輪場の自転車がなぎ倒され。

よく立ち寄った本屋はさびれ
掘り出し物を漁ったりできた
レコード屋など面影も残らず。

身の丈にあつた買物ができた
商店街で途方に暮れた頃から
密林に出かけてネット買いを。

国内法人税を納めない会社で
買物などしたくない思いなど
蓋をしてしまうような品揃え。

ヒヨドリの鳴声が波形を描き
庭木の花を啄むのに飽きたら
小屋根の雨樋でしばし水浴び。

咲き揃った梨花の絨毯を望む
高架橋を過ぎる列車に乗換え
桜前線は東北辺りを視察中か。
(12.04.27)

食いしん坊

老いの暇つぶしに空いた
土地を貸しますよなんて
やる気なしを見透かされ。

五月半ばと思えなかつた
先週後半の寒さに振返る
田植えを手伝わされた頃。

山田は作業が大変だけど
里田に比べてひと味違う
なんて子供心で噛みしめ。

季節を選ばない野菜など
自作していた頃のものに
比べようもない味変わり。

目が点になる作業から
引きはがされるように
ヨメにそば屋に誘われ。

食は細くなつてきても
好物のこだわりが残り
箸は一枚でも冷酒追加。
(12.05.15)

埋め合わせ

新芽が出ない月桂樹が
庭の若葉を揉みし抱く
雨降りからも取残され。

風雨にさらされ勢いを
増す庭の新緑に際立つ
泰山木の生気のなさも。

歯の治療は復活したが
皮膚アレルギー症状が
スッキリ治らないまま。

なんだか過換気体質と
入れ替わったみたいに
過呼吸から遠のいてる。

急いで治らないことで
それがほかを治したり
なんてのも身体の内に。

手当たり次第の映画で
根をつめた作業後など
煮詰まり気分を解して。
(12.05.18)

落ちこぼれ

若葉が秘かに揺れ動いて
好天気だった金環日食で
五月晴れが甦ったみたい。

庭に出て木立から洩れる
三日月型の影を眺めると
連れ戻される日食初体験。

九割ほど欠けたにしては
子供心に残った薄暗さも
ざわつき感も違うようだ。

松や柘植の影が映ってた
東向きの部屋の障子にも
無数の爪痕のような影が。

一段落した書誌データの
とりまとめ作業の手から
こぼれていた本は何処へ。

数日ばかりで見つけ出す
落ちこぼれ司書のように
書物の空に透かして見る。
(12.05.22)

乗り継ぎ

週明けの通勤時間帯を
狙い撃ちする意地悪な
雷雨に窓の眺めも歪む。

ブルーマンデーに乗る
自転車の行く先々から
本日閉店で追い返され。

ローカル線に乗継いだ
年度末のひとり旅から
書き写した便りが届く。

野宿はいけないからと
阿波踊りを型抜きした
人形の腰つきに誘われ。

色白の声が眼鏡の奥で
囁くように公衆電話に
語りかけるのを眺めた。

自転車から列車に換え
夢列車の頁を閉じたら
どうやら雨も上がって。
(12.05.29)

渦つなぎ

分厚く蒸し暑い曇空に
窓際の太陽光自転車の
置物がゆつたり足漕ぎ。

5のつく日のドンツク
鶯に郭公の鳴声もして
近所の教団分室の響き。

朝方の庭先で見かける
毛虫の形も蠢く様子も
デジカメには残らない。

動画にしたって止まぬ
いのちの動きを複製し
蝶の彼方が閉ざされて。

穴堀を取りあげられた
モグラが栄養過剰など
知る由もなく死に絶え。

何処からか庭先に続き
床下を覗き込むような
蟻の行列の擬態を退治。
(12.06.05)

滞留前線

梅雨入り宣言前から
日めくりの肌触りが
梅雨前線滞留モード。

フクシマの総括無く
時の首相があつさり
原発再稼働を宣言し。

ビジネスマンに習う
真似事でお茶を濁し
グローバルに逃込む。

学ぶべき前例もなく
踏襲すべき事例など
無いのをきっかけに。

オウム事件容疑者が
出頭したり隠れたり
同世代の生活前線は。

雪吊り支柱を外さず
そのままにしていた
庭の南天が立ち直る。
(12.06.12)

夏への補助線

梅雨時の映画鑑賞だが
五月の東映任侠劇から
米五、六〇年代の西部劇へ。

録り置きからの選択で
ウエットからドライに
部屋の空気も変わるか。

猛暑になれば二人とも
快適空調室内で怪談や
ホラー映画など愉しく。

あの日の夕刻に出かけ
落語を聴いた会館での
座席の座り心地の悪さ。

消火器は取り替えても
いざという時のための
緊急避難用物資備えず。

目先や孫子の暮らしも
夏バテ夏やせ知らずへ
日盛り避けて草むしり。
(12.06.15)

梅雨花散策

いつも刈り込み過ぎ
庭の紫陽花を見れど
花盛りを逸したまま。

生気が戻らぬままの
街中に出たりすると
軒端に珍しい鉢植え。

トイレ休憩に立寄った
ビル内の店で見つけた
カミキリムシTシャツ。

昆虫少年の背格好で
薪割りを手伝っては
マダラカミキリ探し。

柘植の茂みに濡れて
隠れるカタツムリが
記憶する肌寒梅雨に。

その日限りの夏椿が
凍りついたみたい
に落花をふみとどまる。
(12.06.22)

素足往来

近所で梅の実が落ち
物置の屋根に当って
よそ見する聞き耳に。

湯上りを待つ枝豆と
ビールのように響く
遠い天日干しの夏が。

ヨメの顔の擦り傷も
七月のカレンダーを
捲ったみたいに治る。

蒲団からハミ出した
手足が畳に涼を求め
夜具は薄物に替わり。

晴れ間に風を通した
廊下や縁側や階段は
素足でストレッチを。

草臥れてきた皮膚で
仕切られた自然から
自由自在な行き来へ。
(12.07.03)

梅雨に唄えば

模型飛行機と見まがう
真上の鷺の羽搏きから
梅雨空が透けて見える。

額紫陽花に不時着した
行方不明の涙のように
脱ぎすてられた燕尾服。

J・カサベテスの映画の
まとわりついて離れぬ
息遣いから下車したら。

横へやってきて小声で
尋ねられた質問に答え
真向かいの小物を忘れ。

動脈と静脈の分岐点で
J・ガルシアの手が紡ぐ
文体の間で気付いたが。

雨に舞い飛ぶ蝶の絵が
撮れないからといって
図鑑のページで肩代り。
(12.07.13)

炎天望遠

地鉄沿線に佇む
真夏日の午後の
廃屋姿の無人駅。

公演会場はどこ
ポケットナビが
導く日傘のヨメ。

墓参りに歩いた
夏の裏山道への
序の口みたい。

アンコール曲の
短いブルースに
夏のエピソード。

吉本青年が泳ぐ
敗戦の海辺から
八月の岸辺まで。

本の山裾を辿り
ねずみホテルの
炉端の夜が明け。
(12.08.07)

夏の書誌

火傷した郵便受けを
感知したかのように
揚羽蝶がギクシヤク。

食荒らされ抜け殻の
葉脈を繋ぎ合わせた
書物を解体する手腕。

一九四五年八月十五日に
魚津で迎えた夏日を
書き綴った書誌便り。

三〇歳代を経てからも
八〇歳代の講演にまで
夏の沈黙を問い続け。

亜熱帯みたいな夏に
生まれた子どもらは
あの夏の暑さ知らず。

軍国青年が称名へと
辿った路線ルートが
まだはっきりしない。
(12.08.28)

庭の間尺

遠い山肌とは違い
屋根の上は素足が
熱くて顔も火照る。

剪定ついでに草も
刈り込んだ庭師の
手並みを広角撮影。

木の太さと間隔も
田舎の庭を間引き
移植して四十年越し。

祖父に連れられて
作業の手伝いなど
山道も忘れ去った。

庭を見て思う山の
南斜面の杉の間を
すり抜ける陽射し。

自転車跨ぎ庭先で
森林と海をつなぐ
川の流域を走った。
(12.09.07)

苔の閱歴

刈取り終えた田で
夜来の雨が九月の
猛暑も刈取ったか。

庭木の剪定作業の
残り屑も洗い流し
草ひとつない庭土。

老果てる手前まで
雑草を生やさない
母の手になる苔は。

下をはじめとした
介護で分断される
暮らしから別れて。

庭に苔も生えない
二人暮らしになり
草も庭師に刈らせ。

刈り込まれ過ぎて
久しく花を見ない
紫陽花を辿る書誌。
(12.09.11)

猫と老人

十字路で立ち話抄二〇一一年一月〜二〇一二年九月

発行 二〇一五年四月一日

著者 吉田恵吉

編集・発行 〒939-8036 富山市

高屋敷731-6 吉田恵吉